汚れた宝石（ダイヤ）

大藪 春彦

KOSAIDO BLUE BOOKS

著者略歴　昭和10年２月京城生れ。推理作家協会会員、大物狩猟クラブ所属。早稲田大学在学中に「野獣死すべし」を発表、その非情と残忍さのみなぎる特異な文体は、文芸界に一大センセーションをまきおこし、氏を一躍流行作家の座へおしあげた。以来、氏が書きあげた作品群は実に膨大なものである。主な作品には「凶銃ワルサーＰ38」「戦いの肖像」「暴力列島」「拳銃稼業」等……。

汚れた宝石

KOSAIDO BLUE BOOKS

著　者　大藪春彦

発行者　櫻井義晃

発行所　廣済堂出版
東京都千代田区飯田橋
2-4-3　日吉ビル
電話 03-263-0781(代)
振替 東京　16437番

印　刷　廣済堂印刷株式会社

© 1976　大藪春彦

定価は、カバーに明示してあります。

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

村山澄子様　寄贈

汚れた宝石（ダイヤ）

大藪 春彦

KOSAIDO BLUE BOOKS

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

目次

汚れた宝石　8

スパイ狩り　71

殺し屋誕生　173

裏切者　191

汚れた宝石

汚れた宝石（ダイヤ）

1

十一月の夜気は冷たく乾いていた。午後十一時を過ぎると、東京国際空港にも人影は少ない。逆風をついて、ハワイ経由のパン・アメリカンのボーイング七二七が着陸してきた。タラップを降りる、華やかなレイを首にかけた観光客の一行のあとから、適当に汚れたバーバリーのトレンチコートの襟を深く立てた長身の男が姿を現わした。ノックスのソフトを目深にかむっている。伊達邦彦であった。秀麗な顔には、中年に近づいてきた男の燻（いぶ）し銀の魅力が加わっている。逃亡中にスイスで受けた軽い整形手術によって、その顔は東洋と欧州の混血である東欧の貴公子といった印象を与える。

風が邦彦のトレンチコートの裾を翻えらせた。左手に軽々と黒革のスーツケースを提げた邦彦は、数年ぶりの故国の空気を胸一杯に吸いこみ、空港ビルのほうに歩きだす。しなやかな体のこ

なしは、若い頃と変わっていない。
空港税関では、邦彦はイギリス政府発行の公用パス・ポートを示した。名前はフィリップ・ブラウン。職業は英国外務省二等書記官となっている。邦彦が所属している英国外務省情報部が用意してくれた公用パス・ポートだ。
「これは、失礼しました。ようこそ。どうぞ、お通りください」
税関吏は愛想笑いと共に下手な英語で言った。
「ありがとう」
邦彦は完璧なロンドン訛りで答え、蓋を開かれなかったスーツケースを再び手にした。
空港ビルを出るとクラウンのタクシーを拾った。
「英国大使館に」
と、日本語で命じる。
「高速道路を通ってもいいですか?」
タクシーの運転手は、軽い驚きの表情を見せながら言った。
「好きなように」
邦彦は答えた。
心臓の上の背広の内ポケットから、拳銃弾やカービン弾程度なら貫通出来ない硬度を持つ、特

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongb

殊グラスファイバー製のシガレットケースを取出す。キリアージュのエジプト・タバコを抜いて、ダンヒルの純銀のライターの火を移した。左手首につけたオール・プラチナのローレックスの黒い文字板の螢光が十一時半を示している。

右の袖口には、ロンドンのジェームス・バーディ・アンド・サンズの店で作らせた三十八口径スペシャルの超小型ディリンジャー拳銃が隠されている。

タクシーは高速一号に入った。けちくさい日本にふさわしい、狭苦しく曲がりくねった高速道路があったもんだ、と邦彦は苦笑いしながらも、変貌した東京の夜景に目を見張らずにはいられない。

破壊活動班員として世界各国を駆けめぐった邦彦だが、故国日本にだけは足を踏み入れなかった。殺人の時効が成立するまでには、まだ十年以上を必要とするからだ。

その邦彦が日本に帰ってきた。ホームシックにとりつかれたわけではない。任務を帯び、逮捕される危険を冒して帰ってきたのだ。スパイである邦彦には命令を拒む自由はなかった。

日銀の地下第二金庫に眠っている戦時中の接収ダイヤの残量は十六万一千カラット、時価約二百五十億円と伝えられている。そのダイヤを犯罪秘密結社マフィアが狙っている……という情報を摑んだのが、米国のＣＩＡであった。

その情報は、世界のダイヤモンド市場を支配するデ・ビーアスのダイヤモンド・シンジケート

を通じて英国政府に漏れた。周知のようにダイヤモンド・シンジケートは世界のダイヤ相場を独占的に操作してダイヤの暴落を防ぎ、年に約七パーセントほど値上りするように計っている。

ダイヤモンド・シンジケートは、自分のところの息がかかったロンドンのダイヤモンド取引所を通じてダイヤを売買する。その扱い額は全世界の生産額の九十数パーセントにのぼる。ソ連やその衛星国でさえも、ダイヤモンド・シンジケートと協定を結んでいるほどだ。

ダイヤモンド取引所は年に約四億ドル——当時の換算率で千四百億円のダイヤをアメリカに売る。つまり、巨額のドルをイギリスのために稼ぐのだ。イギリスが大国としてのメンツを保っていられる理由の一つは、ロンドンのダイヤモンド取引所を抱えていることがあるため——という事実は否定出来ない。

マフィアが日銀で保管中のダイヤの強奪に成功したら、それを売りさばくのにダイヤモンド・シンジケートを通すようなことはしないであろう。そのために世界のダイヤの値崩れが起こったとしたら、イギリス自体にとっても大損害だ。

したがってイギリスにとっても、マフィア団の計画が実行に移されたら、対岸の火事ではすまされなくなる。英国外務省情報部は米国ＣＩＡと連絡をとり、マフィア団の日銀襲撃を不成功に終らせるために、日本に精通している邦彦を東京に送りこんだのだ……。

タクシーは新橋のあたりから高速四号線に入った。皇居の外側を遠回りして一番町のほうに向

かうのは、少しでも多く料金を稼ぎたいからだ。
時速七十から九十を上下するそのクラウンのタクシーの後方百五十メーターのあたりを、クリーム色のフォード・ムスタングのハード・トップがぴったりとついてきている。
ムスタングのロード・ホールディングは米車の例にもれず芳しいほうではないが、それでもタクシーよりはましだから、圧倒的な馬力とあいまって楽々とついてくる。運転している男も助手席の男も、黒に近い褐色の髪と瞳を持つラテン系の男であった。
江戸橋のランプを過ぎたあたりでムスタングは急加速した。背後から急激に接近してくるヘッドライトに、邦彦は本能的に上体を低くかがめる。
タクシーの運転手は追越されまいとしてアクセル・ペダルを床まで踏みこんだ。しかしムスタングはたちまちタクシーに追いついた。右側の車線に出ると一気に追越す。タクシーの運転手は口のなかでののしった。
追越したムスタングは、たちまちタクシーの前方百メーターに出ると派手に尻を振った。そのとき、ムスタングのトランクの下のあたりから、大型の画鋲のようなものが、鈍く光りながら振りまかれる。
「危ない、停めろ！」
邦彦は叫んだ。

一呼吸置いた感じでタクシーの運転手は急ブレーキを踏んだ。しかし、時速が百二十キロを越えていたタクシーは、ブレーキがフェードして、すぐには車速が落ちない。たちまち、道路に振りまかれていた大型の画鋲のようなものを踏みつける。

一瞬、タクシーの右前輪が炸裂した。大きく傾いたタクシーは、潰れた右前輪を軸にしてコマのようにスピンしはじめた。二車線しかないので、このままではコンクリートの防御塀にぶつかる。

運転手は恐怖に麻痺したようにハンドルにかじりつき、足はブレーキを踏み続けていた。

「ブレーキじゃない。アクセルを踏むんだ！」

両手で頭と顔を覆った邦彦はそう叫ぼうとしたが、声にならなかった。シートに体を倒す。

タクシーは、まず右のフェンダー部からコンクリート壁に叩きつけられて左に吹っとばされた。次いで、左のコンクリート塀に頭から突っこんで停まる。グシャグシャになったラジエーターとエンジンから、オイルと水の蒸気を凄まじく吹きあげた。

衝撃でフロントシートの背に叩きつけられた邦彦は一瞬だが気を失った。意識を取り戻し、骨折がないことを確かめてから起き上がる。体はさほど痛まなかった。

タクシーの運転手は歪んだダッシュボードにもたれるようにして動かない。顔は破れたフロントグラスの外に突きだされている。そして、ハンドルの軸が、槍のように運転手の胸から背中に

突き抜けていた。道路に散らばった画鋲のようなものは、ドライアイス製らしく、見る間に溶けて蒸発した。

2

半時間後、邦彦は九段坂上にある桜マンションの七〇三号室のなかにいた。あれから、事故を見て急停車したトラックの荷台にもぐりこんで高速道路から脱け出したのだ。

部屋の調度は質素であったが、暖炉で燃える樅の炎と酒の並んだ飾り棚が冷たい雰囲気を柔らげていた。突き当たりに寝室のドアが見える。

邦彦の前に、灰色の瞳とバラ色の肌を持つ小肥りの男が立っていた。イエーガーのセーターを羽織り、傷だらけのパイプをくわえている。

「よく来てくれた。情報部海外第三課の東京出張所長パーキンスだ」

男は手を差しのべた。

「よろしく」

「飲むだろう？　ソーダで割る？　それとも水割りかね？　まあ、掛けたまえ」

「ストレートで——」

邦彦はソフトとコートを脱ぎ、暖炉の前の揺り椅子に腰を降ろし、

「空港からの道で危なく自動車事故に見せかけて殺されるところでした。私を乗せていたタクシーの運転手のほうは死にましたよ」

と、つぶやいた。コートをとったあとには、グロレックスの素晴しい生地と仕立てのコーヒー・ブラウン色の背広が現われる。わざと薄汚れたコートをつけるのがイギリス流のおしゃれなのだ。

「どこかで君に関する情報がもれたな」

酒棚の前でパーキンスは眉を寄せた。

「弱りました。しかし、考えようによっては、むこうのほうから接近してくれたほうが、私にとってはもぐりこむのに手間がはぶけるとも言えるわけで」

邦彦は苦笑いした。白い歯がきらめく。

パーキンスは、ブキャナン・ブラック・アンド・ホワイトの瓶と二つのグラスを運んできた。二つのグラスにスコッチを注ぎ、

「日銀保管のダイヤについて、色々とミステリーじみた噂がひろまっていることは知っているだろうな？」

「まあね」

邦彦は辛口のスコッチを喉に流した。

「戦時中に日本の公益営団が軍用精密工業品に必要だからという理由で、供出の形で全国から強

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb